インディアナ日本語学校便り 第5号

令和６年５月４日事務所 317－255－1631 メール ijls@indiana-j-school,net

(HP) http://www.indiana-j-school.net　　校長　森 勝義

「令和６年度児童生徒の作品集①」

校長　森　勝義

６年２組「帰り道」を読んで

福村　映斗

ぼくは、帰り道を読んで、律と僕は似ているなと思いました。なぜならぼくは、たまに周也のように落ち着きがなかったり、よくしゃべったりする時があるけど、基本的にマイペースだし、律みたいに、「夏と冬は、どっちが好き？」と聞かれたとき、すぐに決められず、「夏はたくさん遊べて楽しいし、冬はクリスマスがあるし」と迷ってしまいます。

そして１の場面で、律は「ぼく、晴れが好きだけど、たまには雨も好きだ」と勇気をふりしぼって、言っています。ぼくだったら、そのまま言えないで心に残ってしまっていただろうから、律が勇気をふりしぼって言ったのは、すごいと思いました。

さらにぼくは「帰り道」を読んで、「言葉」とは人をほめれば人を喜ばせることができるけれど、使い方を間違えれば人をきずつけることもできるものだと思いました。実際にぼくは、友達に軽い気持ちで悪口をいわれ、すごくきずつき、友達をやめてしまったことがありました。律や周也も、周也が軽くつっこんだつもりが、律の心に重くひびいてしまっています。このように「言葉」とは、正しく使えば人と楽しくいられるけど、軽い思いで使えば、人をきずつけてしまいます。

小森　都宥子

私は「律」は、身長な性格でおっとりしていると思います。対して「周也」は、人の話を聞かなくて、よけいな事を言ってしまう人です。二人は喧嘩してから、気まずい雰囲気でかえっていましたが、雨が降り、笑い合って仲直りしました。私は母と喧嘩をしますが、した後はしばらく気まずくなるため、よく分かります。

ところでこの物語は、二つの章に分かれており、それぞれの視点で書かれれいます。１の場面が律視点、２の場面が周也視点というふうです。視点を分けて書く事によって、二人の気持ちがそれぞれ分かるため、二人に共感できます。私はどちらかと言うと、「律」に似ていると思います。なぜなら私も「どっちが好き」って話になったら悩んでしまうと思ったからです。ですが、私はあまりおっとりしていないし、くよくよ悩みません。だからもし私が律だったら、特に仲直りとかしなくても、仲がもとに戻る気がします。私と母の喧嘩もそんな感じです。仲直りの仕方は、人それぞれだと思いました。

矢ケ﨑　結也

ぼくが読んだのは、「帰り道」という本です。この本では、律と周也の心情の変化がそれぞれの視点で書かれています。

ぼくはこの本の中で、周也に勇気を出して自分の気持ちを伝える律がすごいと思いました。気まずい空気の中、勇気を出して周也に分かってもらえるように自分の気持ちを言える律が本当にすごいと思いました。それに対して、いつも会話のキャッチボールができない周也は、初めて律の言葉を受け止められたのかもしれませんでした。

もし僕が律だったら、周也にうまく自分の気持ちを伝えられていないと思います。僕が周也だった場合、律から気持ちを伝えられても、上手く言葉を受け止められないと思います。なのでこ

の本で僕は、自分の気持ちは勇気を出して自分から言わないと、理解してもらえない、自分の言いたいことだけじゃなくて、相手の話もちゃんと受け止める、と言うことを学びました。ぼくはこれから、気持ちを伝えたいときは、真剣に言う。真剣に言われたときは、それを真剣に受け止めて返す。と言うことを出来るようにしたいと思います。

4年2組　国語単元「白いぼうし」感想文

松島　誓志

ぼくは、「白いぼうし」を読んで、ふしぎな気持ちになりました。なぜなら、女の子がとつぜんバックミラーから消えていたからです。男の子が白いぼうしの中につかまえていたもんしろちょうを、松井さんがにがしてしまいました。そのもんしろちょうは、道にまよってしまったので、女の子になって松井さんの車の後ろのシートにすわって、自分の家に帰ろうとしたのだと思いました。松井さんがおかしいなと思って車を止めたところは、小さな団地の前の野原です。そこには白いちょうがたくさん飛んでいました。ぼくは、女の子になったもんしろちょうがぶじに家に帰れたんだなと思いました。

千代　莉々香

わたしは、「白いぼうし」を読んでおどろきました。なぜなら、タクシーに乗っていたはずの女の子が消えたからです。女の子は、本当はもんしろちょうだけれど、松井さんに助けてくれたお礼を言うために人間に化けていたんだと思いました。男の子につかまって、白いぼうしの中にとじこめられちょうは、松井さんに助けてもらい、そのあとは、なかまたちと安全にくらすことができてよかったなと思いました。

「女の子はだれなのか」

前原　光甫

ぼくは、「白いぼうし」を読んで、ふしぎな物語だと思いました。

なぜなら、女の子は、松井さんが虫とりあみをかかえた男の子のことを考えているうちに、タクシーに乗ってきた女の子がいなくなってしまったからです。松井さんは、タクシーのドアをあけたりしていないし、女の子が出ていく音も聞いていないのに、女の子は消えてしまったのです。

ぼくは、初めて読んだときは、なぜ女の子は消えたのか、女の子はだれなのかわかりませんでした。しかし、さいごまで読んでみると、女の子は、もしかしたら男の子がつかまえようとした白いちょうではないかと思うようになりました。それは、女の子が消えた場所に白いちょうがたくさん飛んでいて、松井さんは、そこで「よかったね。」「よかったよ。」という声を聴いたからです。ぼくは、その声がまいごになった子が帰ってきたことをよろこんでいるみたいに思いました。だから、女の子はちょうだと思いました。

ヒゲ森の言葉の森・探検

ちょうちょう　はっし

丁丁発止

激しく議論を戦わせるさま。刀で激しく打ち合うこと。「丁丁」は刀で続けて打ち合う音。「発止」は硬いものが打ち当たる音。

世に生を得る者は事を為すにあり。

坂本龍馬

１８３５年～１８６７年　幕末の志士。

人が生まれてくるのは、何かを成し遂げるためだ。どのようなことであれ、目標を持って生きよう。